第９回カンボジアスタディツアーで学んだこと

広島県立広島国泰寺高等学校
Momo N.

このニュースレターでは、教育面・歴史面・医療面・文化面の４つに分けて、以下の視点からまとめていきたいと思います。
①最初に思っていたこと
②ツアーで見た現状や学んだこと
③そして帰国後に考えたこと

【教育面】

カンボジアはかつて、ポル・ポト政権下で教育制度が壊滅的な打撃を受けた歴史があり、その影響が現在も残っていると考えていました。そのため、事前学習で調べた、小学校の就学率が高いという統計には、驚きとともに「思ったよりも教育の普及が進んでいる」という印象を持ちました。

寺子屋学習者の自宅

しかし、実際に現地を訪れてみると、統計だけでは見えてこない現実があることに気づかされました。特に、自宅訪問で出会ったある少女の生活環境は衝撃的でした。教科書やインターネットの写真で見たことはありましたが、実際にその場に立ってみると、壁が布で仕切られ、床も隙間だらけの家で暮らす姿に、言葉を失いました。さらに、その家は学校から車で長時間かかる場所にあり、通学の困難さも実感しました。

このような状況を目の当たりにして、小学校の就学率が高いという統計は、都市部の子どもたちを中心に集計されたもので、農村部や辺境地域の実態を反映していない可能性があると感じました。加えて、寺小屋訪問の際に、孤児院に行っていたというガイドの方が「孤児院が学校の代わりになっている」と話してくださったことで、正式な学校に通っていない子どもたちの存在にも気づきました。政府に登録されていない孤児院もあるとのことで、そうした施設に暮らす子どもたちは、統計上「就学している」とは見なされないかもしれません。このような背景を踏まえると、表面的な数値だけでカンボジアの教育の実情を判断することは難しいと感じました。

一方で、寺小屋に通う子どもたちの学ぶ姿勢はとても前向きで、印象的でした。積極的に手を挙げて発言する様子や、学び直しへの意欲を持つ姿から、「学ぶことが楽しい」と感じている様子が伝わってきました。これは、寺小屋では、通常の小学校や中学校で教えられる内容を短縮して学ぶカリキュラムが組まれており、テストに出る範囲を重点的に学ぶという効率的な方法が取られていると聞きました。時間的な制約がある中で、必要最低限の学力を身につけるには適した方法だと感じました。

ただし、効率性を重視するあまり、芸術や体育などの副教科が十分に行われていない点は、子どもたちの多面的な成長の機会を奪ってしまっているのではないかという懸念も抱きました。また、カンボジアはポル・ポト政権という過去の歴史を持っている国だからこそ、今後は平和教育にも力を入れるべきだと感じました。

帰国後、日本とカンボジアの教育を比較し、改めて考えました。日本では教育環境が整っているにもかかわらず、小学生の学習意欲が高いとは言えないのが現状です。一方で、カンボジアでは限られた環境の中でも、学びたいという強い意志を持っている子どもたちがいることに感銘を受けました。私が考えるに、その違いは「知ることの喜び」や「学ぶことで未来が拓ける実感」があるかどうかではないかと思います。日本の子どもたちは、当たり前のように義務教育を受ける中で、「自分から知りたい」と思う機会が減ってしまっているのかもしれません。

子どもが勉強を嫌いになる理由は、「わからない」「できない」経験の積み重ねにあると思います。しかし、「できるかどうか」よりも「知りたい」という気持ちが優先されるようになれば、勉強に対する意欲も自然と高まるのではないでしょうか。その意味で、日本でももっと「学ぶ楽しさ」や「自分の未来と教育のつながり」を感じられるような教育が必要だと感じました。

寺子屋の授業の様子。懸命に学ぶ姿が印象的。

【歴史面】

最初に事前学習で調べたとき、ポル・ポト政権時代の死者数が約２００万人といわれても、あまりイメージが湧かず、知識として知っているだけの状態でした。しかし、実際に現地の博物館やキリングフィールドを訪れて、私はとてもショックを受けました。博物館では、実際に使われた道具や血痕の残る壁を見ることができ、ガイドさんの家族の話を聞くうちに、心が強く締め付けられるのを感じました。

その中で、私の中に大きな疑問が生まれました。なぜ、ユダヤ人の虐殺や日本の原爆投下のように多くの人が亡くなった出来事は世界に広く知られているのに、これほどひどいカンボジアの虐殺は、私を含め多くの人にあまり知られていないのだろうか。また、なぜユダヤ人のことは教科書に載っているのに、カンボジアの大虐殺は教科書に載っていないのだろうかと。

さらに、ガイドさんによると、カンボジアの学生はこの時代のことを授業であまり学ばないそうです。広島出身で幼少期から平和教育を受けてきた私にとって、カンボジアの学生たちがこの虐殺について学んでいないことはとても不思議であり、悲しく感じました。

帰国後、この経験をもとにさまざまなことを調べました。まず、カンボジアの大虐殺があまり知られていない理由の一つは、この内戦が冷戦の真っただ中に起きたため、世界の関心があまり向かなかったこと、そして情報発信が遅れたことが大きいようです。そのため、日本の教科書にも載っていないのだと思います。

しかし、カンボジアの大虐殺を学ぶことは非常に意義があると感じます。ポル・ポトは原始共産主義を理想とし、毛沢東を尊敬していました。このスタディーツアーを通じて、偏った思想がいかに恐ろしいかを改めて知ることができました。

偏った考えの恐ろしさを理解するためにも、世界はもっとカンボジアの歴史を知るべきですし、カンボジアもこの記憶を風化させずに、世界に向けて平和を発信できる国になってほしいと願っています。

キリングフィールドには虐殺された多くの人の遺骨が安置されている。

【医療面】

私はもともと医療にはあまり関心がなく、カンボジアについてもポル・ポト政権時代の影響が今も残っていて、医療もあまり進んでいないのではないかというイメージをぼんやりと持っていただけでした。

しかし、実際に訪れたアンコール小児病院では、そうした思いを大きく覆されました。この病院では、子どもたちへの医療だけでなく、農村部の人々への健康教育にも力を入れており、「治す」だけでなく「予防する」取り組みを大切にしていることが印象的でした。

また、文字が読めない人への配慮がなされた案内表示や、経済的に困難な家庭でも無料で治療が受けられる制度、子どもの不安を少しでもやわらげるための遊具の設置など、あらゆる工夫に心を打たれました。特に、遊びを取り入れた病院の環境づくりは、日本でもぜひ取り入れるべきだと思いました。

さらに驚いたのは、こうした取り組みの多くが「ほとんど寄付によって支えられている」という点です。私はこれまで、募金や寄付に対して少し距離を感じていて、「自分の出したお金が本当に役に立っているのか分からない」と思うこともありました。でもこの病院を見て、寄付が人の命を支える現場を初めてリアルに感じることができました。そして、心から「寄付したい」と思えたのは、人生で初めてのことでした。街を歩いていても、カンボジアではアンコール小児病院のマークがついた寄付箱を至るところで見かけました。それを見て最初は「日本ではあまり寄付箱を見ないな」と感じていましたが、帰国後、よく考えてみると、日本にもコンビニやスーパーのレジ横などに募金箱はあります。

ただ、今回気づいたのは、日本の募金箱には「どこへ」「誰のために」使われるのかが分かりにくいものが多い、ということです。例えば「〇〇基金」「災害支援」など、漠然とした名前が多く、具体的な支援先がイメージしづらいと感じました。一方、アンコール小児病院の寄付箱は、病院のマークや写真が明確に表示されており、「このお金が誰の命を支えるのか」がはっきり伝わってきます。

このように、寄付の対象が具体的であることは、寄付する人の意識や行動にも大きな影響を与えるの

だと気づきました。アンコール小児病院のことを知った今、私はこの病院だけでなく、世界中で支援を必要としている病院や人々にも目を向ける必要があると感じています。

これから、このような現状を多くの人に伝え、寄付の大切さ、そして「自分のお金がどう役立つのか」を知ってもらえるような活動をしていきたいです。そして私自身も、小さな行動から寄付を続けていきたいです。

アンコール小児病院のマーク。

【文化面】

私は、事前学習でカンボジアの文化について学んだとき、ポル・ポト政権時代に伝統舞踊であるアプサラダンスの踊り子や指導者が多く殺されたと知り、その文化は今では壊滅的な状態なのではないかと感じていました。また、アンコールワットも内戦時には戦いに使われていたと聞き、現地は文化的にも大変な状況なのだろうと思っていました。

しかし、実際にカンボジアを訪れてみると、私の予想は大きく裏切られました。その素晴らしい文化に、私は圧倒され、心から感動しました。特にアンコールワットの壮大さには、言葉を失うほどでした。何百年も前に造られたとは思えないほど緻密で美しく、ただの遺跡ではなく、カンボジアの人々の誇りや歴史そのものが刻まれているように感じました。また、現地の人々が無料で入れるという点や、学校でアンコールワットのことを学んでいるという点も、文化を大切にし、地域に開かれている姿勢が表れていてとても素敵だと思いました。

アプサラダンスもとても美しく、幻想的でした。舞台を通じて、古代の王朝に思いをはせることができるような、歴史と伝統の詰まった素敵な舞踊でした。ポル・ポト時代の弾圧から復興し、ここまで美しい形で受け継がれていることに、深い感動を覚えました。また、カンボジアにはこのような素晴らしい文化があるのに、日本ではその存在すら知られていないことが多く、そのことにもショックを受けました。アプサラダンスやアンコールワットのような文化は、もっと多くの人に知られるべきだと思います。

美しく、幻想的なアプサラダンス

壮大なアンコールワット

帰国後、私は「どうすればこの素晴らしい文化を日本の人たちにも知ってもらえるのか」を考えるようになりました。SNS で発信する、学校で紹介する、イベントを企画するなど、小さなことからでもできることはあるはずです。

これから私は、カンボジアの文化を日本に広めるために、自分にできることを探し、少しずつでも行動に移していきたいと思っています。そして、文化を守り続けている現地の人々に少しでも貢献できるような存在になりたいと感じています。

【最後に】

このスタディーツアーは驚きと、新発見の連続で、日々が充実していて、最高のツアーでした。これからは、カンボジアの魅力を幅広く発信出来たらなと思います。このようなツアーに参加できる素晴らしい機会をいただけて本当にうれしかったです。ありがとうございました。